

百怪—都会の怪 1 9 話—

annmin

「お面」

知人の話。

都内のある印刷所で働いている彼は、生まれも育ちも東京の下町で、子供の頃はよく地元のお祭りに参加していた。

「10才くらいの頃だったから、今から20年くらい前ですかね」

近くの神社の境内は今でも緑を多く残していて、少し茂みに入ると、子供なら完全に隠れるくらいだという。

ある夏祭りの夜、両親に連れられて屋台を冷やかして歩いていると、ふと茂みの奥に光を見つけた。

目をこらして見ると、複数の大人が何やら話しているみたいだった。

「好奇心もあったと思いますけど、その時は何でもいから背伸びして、大人の仲間入りをしたがついていたんだと思います」

近付くと、案の定何かの儀式に備えたような見た事もない格好をした大人が複数いた。

「今考えると、山伏のような格好をしていたんじゃないかと」

彼はその大人たちに遠慮無く、

“僕もそれ着たい！”

“僕もそれやりたい！”

と要求した。

大人たちは互いに顔を見合わせていた。

よく見ると、皆お祭りでよく見る鼻の高いお面をしていた。

動作はどこか重く、ビデオのスロー画面を見せられているようだったという。

“これは……したが……”

“……祭り……ダメだ……”

“……帰そう……”

何を言っているのかよく聞こえなかったが、どうやら拒否された事だけはわかった。

ふっ、と突然体が宙に浮いたかと思うと

「えっ？」

気がつくと、彼は社殿の屋根の上にあった。

その高さで突然の事態に怖くなると、大声で泣き出した。

下は大騒ぎになったという。

結局、はしごを使って彼は救出された。

怒られるより、どうやって屋根に上ったのか呆れられたという。

わけを話そうとしたが、なぜかその時は声はどうやっても出ず、仕方なく諦めた。

「次の日は普通に話せたんですけど、

“もっとマシな言い訳を考えろ”って

親父に怒られて」

それでも彼は、今でもそのお祭りを毎年楽しみにしていると語った。

「拍手」

都内で小学校の教師をしている知人から聞いた話。

彼は、昔は大道芸をしており、今でも何かイベントがあると、無料で参加しているという。

こちらの関わる場所のボランティアにも時折足を運んでくれる。

彼のパフォーマンスは、いわゆる「足長」（スティルト）と呼ばれるもので、2～3メートルのいわゆる竹馬の足場部分だけで歩くような技。

それをタキシードなどで正装して、野外、あるいは会場内をねり歩くのだ。

まだ学生だった頃は、練習にも一苦労したという。

住んでいたボロアパートなどで練習出来るはずもなく、いつも近くにある竹林などで彼はトレーニングを行っていた。

「今考えてみれば、もってこいの場所ではありましたね」

足場に乗るには苦労するものの、手をかけるのに大量の竹が存在し、転ぶ心配をする必要はなかった。

ある日、日没まで練習していた彼は、ついにとどの竹にもつかまる事なく、竹林の中を歩ききった。

達成感を抑えきれず、思わずその場で彼は“やったー！！”と叫んでしまった。

「その時、拍手が聞こえたんです」

どこから？ と聞くと上を指差し、“頭の上から”と答えた。

見上げると、頭上のさらに上の方の竹の幹から、それぞれ二本の手が伸びて、拍手を繰り返していた。

「すぐに足場を降りて帰りました。

場所を貸してもらって、祝福もしてくれたのに、失礼な話ですけどね」

その後、その竹林で練習をする事はしなくなった。

ただ、今でもイベントなどに出る時は、
そこにお酒を供えに行くそうだ。

「知らない人」

通っているお寺の近くにある、保育園の
保母さんから聞いた話。

妖の怪24話の14『履物』でもお話を
頂いた方である。

ある時、遊び道具の片付けをしていると、
園児たちが来て『知らない人が来た』と
言ってきた。

不審者なら危ないと思って、すぐにその
場所へ駆けつけると、砂場の前、そこに
落ち葉が大量に集められていた。

「誰がやったの？」

園児たちは首を左右にブンブン振り回し
ながら、口々にそこに知らない人がいた、
と話した。

ちなみに、砂場から離れた場所に大きな
栗の木はあるが、その落ち葉はいろいろな
種類の葉が混じっていたそうだ。

「洞窟」

あるボランティアのバザーに参加して
頂いた、主婦の方から聞いた話。
彼女の家は都内にあり、結構年季の入った家
だったそうで、狭いながら庭もあった。
彼女がまだ小学校低学年くらいの頃の事。
ある時、庭の中心に大きな穴が開いている
のを見つけた。
中はどうやら垂直ではなく斜めに段差が
付いているようで、不思議に思いつつも
その中へと入っていったという。
奥に進むと、彼女より1つか2つ、年下と
思われる少年がいた。
彼は驚いた表情で彼女を見ていたが、やがて
口を開いた。
「お母さんが帰ってくる前に、帰って」
昔風の着物を着ていた記憶があり、顔立ちも
どこか古風な感じを受けたという。
「でもここ、あたしの家だよ？」
そう言うと少年は泣きそうな顔になり、
いじめてしまったと感じた彼女は慌てて
彼をなぐさめるために言った。
「ゴメン。すぐに出ていくから」
来た道、といっても一本道でしかなく、
穴の外へ出た。
出ると、昼間に入ったはずなのに、空には
星が浮かんでいたという。
「あの後、こんな遅くまでどこに行って
たんだって両親に叱られて」
庭の穴の事を説明しようとしたが、その頃
には穴は影も形も無くなっていた。
その実家は、今でもそこにあるとの事だ。

「廊下」

PCで内職をしている知人から聞いた話。
内職と言っても、彼はそれしか仕事をしていないので、それが本職のようなものなのだが、その彼が住んでいたマンションで、妙な体験をしたという。

仕事が一段落ついて落ち着いた時、ずっと家の中にこもっていたので、散歩に行こうと玄関のドアを開けた。

開けた時に、視界に女の子が飛び込んできた。

まだ小学校に上がるか上がる前か、くらいの少女が、赤い和服にその身を包んで、廊下を踊るようにして飛び回っていた。

「こんな子、近所にいたかなあ」

その少女は、何がそんなに楽しいのか、ずっと笑っていたという。

ただ不思議な事に声は聞こえなかった。

その笑顔を見ているうちに、急に眠気に襲われ、彼はまぶたを閉じた。

「気が付くと、病院のベッドの上でした」
医者の話によると、彼は丸二日寝込んでいたそうだ。

運ばれた際、熱を測ったら39度以上もあり、当時流行していた伝染病を疑ったらしい。

熱はすぐに下がり、退院後、救急車を呼んでくれた同じ階の住人がいると聞き、その人にお礼を言いに行った。

「オバサンでしたけどね。ただ、変な事を言われて」

何でも、彼が倒れていたのを見つけた時、背中や周囲に桜の花びらが散っていたという。

「そのマンションは廊下まで屋内の造りになっているから、風で飛んでくる事は考えにくいんだけど」

あの子は何がしたかったんだろうか、そう言って彼は不精ヒゲをなでた。

「リサーチ」

知人から聞いた、さらにその知人の話。
その人は新聞社に勤めていて、編集に関わる都合上、終電や終バスで帰るのは、珍しい事ではなかった。

ある時、いつものように日付も変わった時刻に帰る事になった。

乗り継ぎの最後のバスを待っていると、停留所にそれが来て停車した。

「はて？」

そう思わず彼は声を上げた。

この時間帯のバスは普通、そんなに乗客はいないはずだ。

しかし今目の前にあるバスには、乗客がぎっしりと詰まっている。

彼は数歩後退して、乗る意思の無い事を運転手に示した。

「……ダメか」

小さく運転手がつぶやいたのを、彼の耳は逃さなかった。

やがてそのバスが遠ざかるに連れて、今度は乗客が2、3人しか乗っていない、“いつも通り”のバスがやってきたという。

「そいつは笑っていたよ。

“何者かは知らないがリサーチが足りん！”って」

10年ほど前の、神奈川県での話らしい。

「ミドリガメ」

とある大手に勤めるOLの方から聞いた話。

出勤後、給湯室で来客用の湯のみを洗おうと、水道の蛇口をひねった。すると、水流と共に何かがカランと落ちてきた。

「.....ミドリガメ？」

小さな甲羅がそこにはあった。

まさか蛇口から出てきたわけではないだろうと見ていると、もぞもぞと手足と思われる四肢が甲羅から出てきた。

「やけに細いな、と思って見ていたんですけど」

それは小さな人形のような、細い手足を生やすと、二本足で立ち上がった。

明らかに亀のそれではない頭を左右に振ると、排水溝に向けて止まった。

「後ろ、というか真上からしか見ていなかったの、それが人間の顔をしていたかどうかはわかりませんが」

その排水溝には、ゴミ防止用のキャップが取り付けられていたが、まるで体を溶かすようにして、鉄製のそれを無視して入って行ってしまった。

「何だったんでしょうか、あれは」

後には強烈な生臭い匂いが残されたので、彼女は洗剤で流し場全体を洗うようにして必死にその匂いを消したという。

場所は、六本木の有名なオフィスビルだったそうだ。

「仰向け」

お寺で修行する同僚から聞いた話。

以前、子供が木に登ったり、いろいろと危険な場所に上がろうとするのを、心配して相談に来た母親がいたという。

「子供ってそんなものだと思うんだけど」
見つけ次第注意したり止めさせたりする、
くらいしか対応は思いつかない。

とにかく常に気を配っている事ですね、と
お茶を濁していた。

ところがある日、その母親から、子供が
高いところに登るを止めてくれたという
話を聞いた。

何かきっかけでも、と聞くとその母親は
困ったような顔をして、彼に理由を話し
始めた。

「子供から聞いたらしいのだが、何でも
登る場所とか大体は決まっていたようで」
一番多いのは公園のトイレの上だった。

近くに大きな木があり、その木を登って
トイレの屋上に上がっていたという。

トイレの屋上は四方が区切られていて、
そこには段差があり、自然に降った雨で
水が溜まっていた。

こういう場合、屋上に上がるのは止める
のだそうだが—

「何か、木の上から屋上の水たまりを見て
いたら、水中に魚が見えたらしい」
それはお腹を上にしており、最初は死んだ
魚でも投げ込まれたかな？ と思っていた
そう。

しかし、その魚は身をくねらせて泳いで
いる。

仰向けに泳いでいるそれを不思議に思って
見ていると、

「バシャッ、と水中から手が現れて」
それが水中に戻り、波紋が収まると魚も
消えていた。

怖くなった子供は急いで木から下りて、
それ以来木に登ったりするのを止めて

いるのだという。

「結果的には良かったんじゃないか？」

私が聞くと彼は首を左右に振った。

「最初の3日だけで、それからは元通りに
なったって言ってた」

世の中、上手くいかないねえ、と彼は
ため息をつきつつ頭をかいた。

「剥製」

ある大学院生の女性の方から聞いた話。
大学には当然の事ながら、学術において
必要な標本やサンプルが保管されている。
彼女はある時、生物学部の同僚から、資料を
探すのを頼まれたという。

「手伝ってくれ、イコール力仕事なんです
けどね。」

「研究には男も女もありませんから」
探しているうちに、彼女は動物の剥製を
見つけた。
意図的にではなく、古いダンボールの箱を
開けたら、偶然視界に入ってきたという。
タヌキの剥製だった。
しかし、どこか妙な違和感を感じた。
もっとよく見てみようとして、そのガラスの
ケースを持ち上げ、照明の下で目をこらす。
ガラスケースの上といわず横面といわず、
模様のような跡が付いている。
一つの大きな円形に、4つの爪あと。
それらは全て、中から付けられているように
見えたという。
短く声を上げると同時に、ガラスケースを
落としてしまった。

「幸い、割れませんでしたけど、落とした
音を聞いた同僚が駆けつけてきて」
ガラスケースをのぞくと、すでに足跡は
どこにもなかった。

「化かされたんですかねえ、私」
後で教授に話をしたが、よくある事では
ないが、そう珍しい事でもないと言われた
そうだ。

「柿」

家と会社が近く、自転車通勤している
知人から聞いた話。

ある時ちょっとしたミスで残業が発生し、
終電が関係無い彼は一番遅くまで会社に
残った。

作業が終わり、彼は帰宅する事にした。

会社から家まで約30分。

距離にして、一駅区間より少し長い程度。

「だから、考えられるのはその間にとって
事なんですけど……」

家に帰り、上着を脱いでハンガーにかける。

と、片側が妙に重く感じる。

見ると、左側のポケットがふくらんでいる。

何か入れたかな？ と手を入れると……

「柿が一個入ってました。

……もちろん入れた覚えなんてないし、
深夜2時過ぎだったし」

別に欲しかったわけでもないが、かと言って
そのまま捨てるのも気が引けた。

一応冷蔵庫に保管する事にしたが、食べる気
にもなれず放置。

結局、痛んできた頃に捨てたという。

「昔は、ああいうのでもご褒美になったん
ですかねえ」

それから間もなく他の会社に転職した彼は、
今は電車通勤となっている。

「肉人」

「保育園の頃だったから、20年ほど前の事になりますけど」

都内のある大手系列のコーヒーショップに務めるその女性は、いわゆる“歴女”で、そのきっかけとなった出来事を話してくれた。

彼女の通っていた保育園では、毎年夏になると肝だめしが行われた。

もちろん、先生や保護者グループと一緒にである。

肝試しと言っても、そのためにどこかへ電車で行くとかはなく、町の中の公園から公園へと渡り歩くだけ。

しかし、いつもは寝ている時間に起きている、というのが園児たちにはこの上ない刺激となっていた。

「その肝だめしイベントの時は、みんな昼寝をいつもより取らされるんです。時刻にしてみれば10時ちょっと過ぎ程度ですが、園児にしてみれば未知の時間ですからね」

外灯があるとはいえ、うっそうと木々の茂った公園を選んで歩くので、当時の彼女にしてみれば充分怖かったという。最初の公園を出発し、次の公園に差し掛かった時、それは現れた。

「何ていうか……全身真っ白な人が行き先の公園からひょいって出てきて。それで一瞬でまたひょいって引っ込んだんですけど」

それは某タイヤメーカーのキャラクターのように、たるんだような肉感があった。彼女は引率の先生のスカートを引っ張り、「何かいた！ 何かいた！」え、何々？ どうしたの？ と聞いてくる先生に、彼女は今見たものを説明した。

「ちょっと待ってて」

すぐ後ろにいた男の先生が呼ばれ、さらに他の先生も次々と集まってきた。

同行していた保護者の数名も呼ばれ、何か話し合っていたが—

「もうすぐ雨が降る、という事なので今日は肝だめしは終わりで—す」
そこでいきなり肝だめしは解散となり、保護者が同行している園児はそのまま親と一緒に、他の保護者は保育園待機だったので、先生たちと一緒に保育園まで戻った後に帰る事になった。

後年、彼女のお母さんにその事を話すと、

「あの時保育園で待っていたらねえ、変質者が出た可能性があるからって連絡が来てねえ」

しかし、彼女は納得しなかった。
何か自分の見た物の記録は無いかと本や文献を読み漁り、やっとそれに該当？する物を見つけたという。

「徳川家康が、二代目秀忠に將軍職を譲った折、駿府に移ったんです。
そこで……」

全身肉の塊のような妖怪が出た、という話があるそうである。

またその肉を食べれば、武勇が増したのにと残念がられた、と書かれていたとか。

「でも、アレを間近に見たら食べてみたいとかは思いませんよ」

「若返るとか、美肌効果があるとかだったら？」

私の問いに彼女は考え込んでしまった。
そして私もその後、近くで話を聞いていた師匠に叱られた。

ちなみに、公園は都内にあり、遊具は変わったものの今もそこにあるという。

「ガード下」

40代のグラフィッカーの方から聞いた話。彼の住まいは都内で、小学校の頃に仲の良い友達がいって、よくお互いの家を行き来して遊んでいた。

ただ、道中ガード下のトンネルを通らねばならず、昼はともかく、暗くなったそこを歩くのはとても嫌だったという。

「距離にして10mも無いはずなんですけどね。」

ただ、子供の頃は無性に怖くって」

ある日、また友人の家で遊んで遅くなってしまった彼は、トンネルの前で悩んでいた。抜け道なんてあるわけもないし……

と思って横を見ると、まだ舗装されていない地面の上に、石板を置いた道があった。

どうやらガード下をくぐらなくても、向こうへ行けるようだ。

見上げると、外灯も両端にしっかり立っている。

以来、暗くなるまで遊んだ時は、その道を通って帰るようになった。

時は流れ、大人になった時に、彼はようやく矛盾に気付いた。

「いや、だってねえ。」

どう考えたってガード下くぐらなきゃ家に帰れないはずなんですよ。

それに、あの辺りでまだ土のままの道路なんて、もう無かったはずですから」

思い出してみると、外灯も妙に古めかしいというか、時代が違う感じがしたという。

調べてみると、昭和30年代の頃の外灯が、一番記憶にピッタリ合ったそう。

「神隠し」

個人的な話だが、私は生まれた時は未熟児で専用の新生児施設のお世話になった。

その施設の看護婦（今は看護師）から、母が聞いた話。

ある時、比較的元気な新生児の部屋から、子供が1人いなくなった。

しかも、ベッドは高い柵で囲まれている。そもそも1人でどこかへ行けるはずは無い。

「当然、最初に思い浮かんだのは“誘拐”です。

でも、未熟児用の施設なので、医者とスタッフは24時間待機体制ですから」
良くも悪くも人の出入りが激しいので、関係者の目を盗んで、というのは絶対不可能。

施設内を全チェックし、それでも見つからなければ警察に.....

という話になった時、彼女は室内の異常に気付いた。

「同じ部屋の.....他のベッドに寝ていた新生児がみんな起きて、ハイハイして柵に頭を押し付けていたんです」

その頭を押し付ける方向は皆一箇所を指していた。

そこには、緊急用の搬送ベッドがある。

調べてみると、そのベッドと壁の間に行方不明になった新生児が眠っていた。

「他の赤ちゃんたちが、いる場所を知っていたのも不思議なんですけど.....

結局、誰が赤ちゃんをベッドの裏に？

というのもわからずじまいでした」

今は場所を移転しているらしいが、その施設は現存している。

「文字」

都内に住む女性から聞いた話。
彼女は都心に近い企業に勤めており、
その日は取引先に資料を持っていく用事で
外出していた。
無事資料を届け、いざ帰ろうかという時
不意に雨が降り出した。
いわゆる夕立で、突然の事に驚いた彼女は
近くに公園を見つけ、その公衆トイレで
雨宿りする事にした。
最近公衆トイレも昔と比べれば比較的
綺麗で、問題は他に人がいないかという
事だったが、幸いその時は無人。
入り口前のスペースで、雨音を聞きながら
彼女は一息ついた。
「でも、その時暗いなって思ったんです」
雨が降っている以上、多少は暗くなるのが
当たり前である。
しかし、その暗さとは何か異なる。
電気や自然光を無視したような、そんな
感じを受けたという。
「そうしているうちに、壁とか床とかに
何かが浮き出てきて」
それは、何とも形容し難かったという。
アルファベットと、ナスカの地上絵を
混ぜ合わせたような図形が次々と平面に
浮き出てくる。
『ここにいちゃいけない！』
とっさにそう判断した彼女は、転がるように
トイレの外へと飛び出した。
すると、あれだけ降っていた雨は一滴も無く
夕日がまぶしく目に入る。
振り返ると、一応公園の中ではあったが、
そこは茂みになっており、その中から飛び
出てきたような形になっていたという。
「後で思い返してみたら、入ったトイレって
.....本当にトイレかどうかはわかりません
けど、木造だったんですよ。
今時、そんなの都内の公園にあるのかな」
後日確認したところ、その公園のトイレは

よくあるコンクリート製だったそうだ。

「玉」

「郵政民営化の頃だから、もう10年くらい前だね」

IT関連に勤めている男性から聞いた話。SEやプログラマーといった専門職ではなくスケジュール管理をしていたという。

「下請けに1人か2人で派遣される、まあ“お目付け役”だね。

大手と言われているところは、基本開発能力無いからなあ」

とはいえ、仕事はかなり忙しい。

“お目付け役”が派遣されるところは、たいてい納期が遅れたりしている、いわゆる“修羅場”が多かった。

「だから、おちおち休む事も出来ない。

熱を出してフラフラになっても、

必ず一度は現場に顔を出す。

丸一日いるといたないとでは、緊張感が違うからね」

ある時、40度近い熱を出した彼は、いったん現場に出向してから病院へ行こうと足を早めていた。

しかし、電車内の空気と混雑に気分がさらに悪化。

それでも何とか駅を出て大通りに来た時、一休み入れた。

現場のビルまで後もう何分も無い。

とにかく顔さえ出せば……と顔を上げると、妙な物が見えた。

「何かね。何というんだろうか……

青っぽい物が、すごい速さで動いていたんだ」

よく見ると、それは球体の形をしていた。

運動会で使われる大玉転がしの玉を、一回り小さくしたような物。

それが道を行き交う人々の間を避け、

あるいはぶつかりながら移動している。

さながら、ビリヤードの玉のように。

それから目を離せないでいると、その球体はいつの間にか自分の目前まで迫っていた。

しかし熱のためか、精神も体もどこか反応がにぶい。

どうなるのかと見守っていると—

「マズそうだなあ、これは」

耳鳴りまで聞こえていた耳に、その声ははっきりと聞こえたという。

そう言い残すと、球体は横を通り過ぎていった。

振り返ったが、そこにはいつもの雑踏があるだけだったという。

「熱のための幻聴と幻覚だったと、自分ではそう思ってるんだけどね」

そんな物を見たのは、後にも先にもそれだけだったけど、と彼は付け加えた。

「スイング」

都内にある病院に勤める、小児科の先生から聞いた話。

基本、子供は容態変化が激しく、すぐに熱を出したり体調を崩す。

1才違いば薬の量も変えなければならず、神経の休まるヒマは無いという。

「病院で一番儲けたければ、小児科と緊急指定を止めればいいって言われているくらいですから」

ある時、熱にうなされている子供がいた。解熱や投薬を試みるが、一向に下がる気配が無い。

万が一の容態悪化に備えて、彼は医局に泊り込む事にした。

一晩明けると、容態は落ち着いていた。脈も正常に戻りつつあり、彼はホッと一息ついたという。

仮眠を取ろうと自室へ戻ろうとした彼を、一人の看護師が呼び止めた。

「何でしょうか、コレ」

そう言って差し出したのは、オニヤンマと呼ばれる大きなトンボの死骸だった。

朝、検診のために子供の病室に入ると、それがベッドの下に落ちていたらしい。都内の病院で珍しいとも思ったが、何とも答えようがなく、

“捨てなさい、そんなもの”

と言って、彼は自室へと戻った。

「その後、回復したその子から話を聞く機会があったんだけど」

聞くと、うなされている間、彼は夢を見ていたという。

何かがブンブンと自分の周りを飛び回っていて、怖くて動けないでいる夢だった。

すると、彼の目の前にぬっと誰かが現れた。高校球児のように、白いユニフォームに身を包み、手にはバットを持っていた。

ちょうど年齢もそのくらいに見えたという。そしてバッターのように構えたかと思うと、

振りぬいた。

パン！ という音と共に、ブンブン飛び
回っていた何かの音も消えたという。

一緒に聞いていた両親のうち母親が、

「それ、お爺ちゃんかも」と言い出した。
と
言い出した。

何でも彼女の父親はすでに他界していたが、
六大学野球に出場したほどの打者であったと
いう。

「医者をやって長いけど、やっぱり肉親の
救おうとする力もすごいと思いますね」

“何でユニフォーム姿だったんでしょう？”

そう問うと、

「可愛い孫に、一番格好良かった時の姿を
見せたかったんじゃないの？」

そう彼は笑って答えた。

「余計」

以前にも書いたかもしれないが、私は若い頃、短い間だが仏門関係で修行をしていた。

その修行仲間というか同門に、形容し難い男がいた。

バカというか天然というか、どれくらいと問われれば、かつて剣道の試合で、相手に回し蹴りを食らわした級の、度し難いバカである。

さて、そんなバカでも一通り修行すれば、“それなり”に、見える・感じるようになってくる。

いつもは山や修験地で異質な気配を確認するのだが、ある時家でその気配を察知したらしい。

その時の彼は気配を感じる事が出来るものの、対処方法など知らない。

こういう時は大人しく時間が過ぎるのを待つか、対処出来る人間に連絡を取るものだが、あいにくとそういう殊勝な心がけは持ち合わせていない人間だった。

「とにかく、呆れさせたら勝ちだと
思ってさ」

PCを起動させ、保存してあるエロ動画を
大音量で流したという。

しばらくすると気配は消えた。

「勝ったと思った」

ここまで聞いて私も呆れる他無かったが、それも対処方法として有りなのか、と半ば感心していた。

しかし、事はそれでは済まなかった。

「それから、妙な気配がする度に、
エロ動画で撃退していたんだよ。

そしたらさ」

ある時、寺にやってきた彼を師がとがめた。
師は険しい表情をして彼を問い質した。

「何をした」

彼はそれまでしてきた事を話すと、

「とんでもないモン、連れて来てるぞ」

その言葉に青くなった彼は、すぐにお祓いを受けた。

水ごりをし、小一時間ほどでそれは終わったという。

その後、彼は当然の如く師に散々叱られた。

「余計な事が、余計なものを招くのだ」

一体何が憑いていたのかを聞いたが、

「今のお前に話したら、喜んで取り込まれ

そうだから言わん」

としか言われなかったという。

私もその後、聞く機会を得たが、やはり師は答えてはくれなかった。

死ぬ前には答えてやると言われているので、

聞くのを楽しみにしている。

「漢字」

「姉から聞いた話ですが」

そう話した彼の姉には、小学校低学年の娘がいた。

彼に取っては姪であり、夫と家族3人で実家からさほど離れていない所で暮らしていたという。

「家の中で、姪が覚えたての漢字を落書き
しまくって困るって」

それは“木”とか“口”とか簡単な物に限られていたが、家中に書きまくるので閉口していた。

“そんなに書きたいのなら、自分の手に書きなさい”と呆れながら注意したところ、“自分の手じゃなきゃダメ?”と返してきた。

「自分の手ってどういう事? って聞いたら
夜中に壁から手が出てくるので、それにも
落書きしていたって……」

“お父さんよりも大きな手”と言ってたのでかなりの大きさには違いない。

さらにその手は真っ赤だったという。

「さらに、書く字を要求していたみたい
なんですよ。

“飲む物飲む物”とか“食べる食べる”
って言ってたと」

難しい漢字はまだ書けないので、ひらがなで言われた事を書いた。

するとその手は壁の中へ引っ込み、しばらくすると落書きの消えた手がまた現れる、という事を繰り返したという。

心配した姉は、知り合いのお寺に娘を連れて相談に行った。

対応したお坊さんは、

“あまり良くないものです”

と言い、対処する方法を教えてくれた。

その夜、例の手がまた出現した。

姪は、お坊さんに言われた通りに字を書いた。

『火』

手が壁に引っ込んだ後、“ぐぎゃぎゃわ”と
悲鳴が聞こえた。

それ以来、“手”は現れなくなったという。
今は引っ越しているが、品川の大井町沿線の
借家であった出来事だそうだ。

「公園」

都内にある、区が管理する大きな公園。

その施設管理をしている人から聞いた話。管理施設なので、年中無休というわけではなく、また24時間入れるところでもない。きちんと定休日があり、また定刻になると門は閉ざされてしまう。

「大きな池があったり、川の流れも再現している公園だからね。

普通の公園とは違って、メンテナンスも必要だから」

夜にもなると、警備のためにパトロールで公園内を巡回する。

緑も多いので、日が暮れるとその暗さはいっそう際立ってくる。

「外灯はあるんだけどさ、土の地面に木製の橋とか歩いていると、昔の人間って夜はこういう道を歩いていたんだな、とか思って」

もう高齢の彼は、10年前からしているその仕事に不満はなかった。

困るのは、たまに若い職員が派遣されてくる事だという。

「大学出のヤツとか来るんだけど。

“それはそういうものだ”と納得する事が出来ないんだ。

やれ、夜中に遊具で子供が遊んでいる、人口河川に誰か侵入しているとか」

セキュリティシステムには反応しているのだが、行ってみると何も無い。

その度に彼は若い職員に、“アレは子鬼が遊んでいるだけだ”、“アレは小豆洗いが出たんだ”と説明するのだが、どうしても納得しないのだという。

「若いモンの方が頭が固いつてのはどうかと思うよ」

彼は、ああいうモノは都会でもどこでもいるのだろうが、おそらく水の流れとか備えている場所でないと、住みづらいのではないか、と付加えた。